

未来ノート

-202Xの君へ-

体操

むら かみ ま い
村上茉愛

大技「シリバス」

母の思いと情熱

苦悩の高校時代

あの一言で……

習得 無邪気な挑戦心で

もはや、国内では「異次元のゆか」と言っている。

26日にあった全日本個人総合選手権の女子予選。昨秋の世界選手権で個人総合の銀メダルを獲得した村上茉愛(22)は、片足での4回転から、自らの「代名詞」となった大技へと演技をつなげていく。

「シリバス」(後方抱え込み2回宙返り2回ひねり)だ。

世界でも数人しかできないと言われるH難度の技で着地をピタリと止め、会場がどっとわく。出場83選手中、ゆかではただ一人の14点台をたたき出した。

が、本人は不満顔。「着地の時、頭が少し下がったので」。成功させるのは当然で、より高い精度を求め、域にきているのだ。

「シリバスは私の存在感を出してくれる技です」

そこまで言える「相棒」を初めて大会で成功させたのは、約10年前。小学6年の冬というから驚きだ。

「できちゃった、という感じでした」。そう振り返るのは、小学生から高校生まで村上を指導した大野和邦・現武庫川女子大監督。トランポリンを使い、シリバスより1回ひねりの少ない「ムーンサルト」を練習している最中、「回りがすぎた」のが、きっかけだったという。

「今もそうだけど、人が

やってないことをやりたいから」と村上は笑う。「この技は難しい」という固定観念にとらわれない無邪気で無限な挑戦心も、成功の大きな要因だった。

大野さんはそんな村上を「白い妖精」と呼ばれたナディア・コマネチ(ルーマニア)と重ね合わせた。1976年モントリオール五輪で、14歳ながら3個の金メダルを獲得した名選手だ。「彼女は10歳から4年間、同じ構成の演技を続けて10点満点を取った、と本で読んだんです。続ければ、難しい技も当たり前になるんだと」

もちろん、習得は本人の力があってこそ。母・英子さんは、娘が生まれながらに「体操に向いている」と信じていた。(山口史朗)



①全日本個人総合選手権のゆかでH難度の「シリバス」の着地をピタリと決める村上茉愛

②ゆかで演技する村上茉愛=いずれも加藤諒撮影

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。